

氏 名 城 有美  
学位の種類 博士（医学）  
学位記番号 甲第582号  
学位授与年月日 令和4年2月10日  
審査委員 主査 教授 竹谷 健  
副査 教授 磯部 威  
副査 准教授 田村 太朗

## 論文審査の結果の要旨

季節性インフルエンザは小児や高齢者・免疫抑制状態の者には致命的な合併症の原因となりうる感染症である。病院職員は病院内で重症化高リスク患者に感染を拡大する可能性があり、病院管理者は病院職員のインフルエンザ感染を最小限に抑える必要がある。そこで、本研究では、病院職員を対象に2014年から2017年のインフルエンザワクチン接種と同時に職員の背景、インフルエンザ罹患歴、その診断方法、ワクチン接種状況等に関するアンケート調査を実施した。本研究は病院職員におけるインフルエンザ罹患の危険因子の探索を目的とする後方視研究で、全シーズンとシーズン毎での解析を行った。

1. 全シーズンを通して5,891名からの回答(有効回答数:5,450)を得た。
2. インフルエンザ感染(迅速キットによる診断)は333名(6.2%)であった。全シーズンを通じたインフルエンザ感染の危険因子として、単変量解析では、女性(OR:1.36, 95%CI:1.02-1.81)、30歳代(OR:1.54, 95%CI:1.04-2.29)、15歳未満の小児との同居(OR:2.18, 95%CI:1.70-2.78)の3因子に有意差を認めた。一方、多変量解析では、女性(OR:1.43, 95%CI:0.82-2.52)、30歳代(OR:1.24, 95%CI:0.77-2.00)、小児との同居(OR:2.06, 95%CI:1.29-3.29)となり、15歳未満の小児との同居のみが有意差を認めた。また、ワクチン接種の有無で感染頻度の有意差は認めなかった。ここで、30歳代の者は57.2%で子供と同居しており、“30歳代”と“同居”は交絡因子であると考えられた。
3. シーズン毎の解析では性別やワクチン接種の有無で感染頻度に有意差を認めなかったが、2013/2014シーズン以外の3シーズンでは小児との同居者の感染が有意に高頻度であった。

以上の結果から、申請者は15歳未満の小児との同居をリスク因子と結論した。本研究は病院内での病院職員による季節性インフルエンザ感染に関し、その危険因子を明らかにするとともに、病院職員の家庭内でのインフルエンザ感染対策の重要性を統計学的に示した貴重な研究であり、今後のインフルエンザ感染対策に一助となりうるものである。